奥野健也

帰ってきたオッケン、第2章の始まり。

少し前から彼が再び滑り始めているという噂を耳にするようになった。およそ3年前、学業に専念するためとの理由からすべてのスポンサーとの契約を解消し引退を表明した奥野健也。当時シグネチャーボードもリリースされプロスケーターとしての活動も順風満帆に見える中でのあまりにも潔い決断だった。「あれで本当に終わりのつもりでした」と彼は言う。彼をまた板の上に連れ戻したのは友人たちからの誘いだった。大学院を卒業後、家業を継ぐための修行を経て今ようやく少し時間の余裕ができた。まだぜんぜん身体が動かないと言うものの、それでも常人離れしたバネはまったくもって健在である。彼が不在だった数年間のうちに台頭してきた若手たちのレベルの高さも感じるという。現在ノースポンサー。だがすでにいくつかのオファーも届いているようだ。「まだどんなかたちになっていくのかはわからないけど、やれるだけのことはやっていきたい」。スケートボーダー奥野健也の第2章と言うべきか。これはまだきっと始まりに過ぎない。

KENYA OKUNO

Switch crooked grind

かつてメインのKグラインドをメイクした人がいたことを聞き、まるで別世界での出来事のように「この高さヤバすぎるね」とか言いつつネクスポに向かおうとするクルーを尻目にいきなりメイクしたスイッチK。おそらく彼にとっては朝飯前の標準装備。

おくの・けんや｜1989年、東京都出身。「オッケン」の愛称で親しまれる東京を代表するスケート貴公子。慶應義塾大学大学院卒という日本ではなかなか珍しい高学歴スケーターでもある。スポンサーはなし。

CHAOS

人間の価値観、世界観は実に多種多様で、それぞれの生き方に直結している。
さまざまな想いを抱き、それぞれの方向を目指す人々が混在している。
それはスケートボーダーに限ったとて例外ではない。
CHAOS＝混沌、混乱、無秩序。「いろんなやつがいる」ことが面白い。

Photos & Words by Shinsaku Arakawa & Marimo（58~61P）

50-50 grind
移動中発見した壁際ヴァージンレール。夕暮れの団地は思いのほか人通りが多い。人様に迷惑をかけたいわけではない。メイクを見守った中学生たちの歓声に救われる。

JIRO KANEKO

金子次郎

天然か、確信犯か。自分らしさへの強いこだわり。

なにかと「天然」と称されることが多い金子次郎。確かに、彼のスケートの激しさや力強さからしてみれば、板から下りたその人柄はあまりにも穏やかで朗らか。一見なにも考えてないと思われてもおかしくはない。実際、天然な部分があることはおそらく事実で、会う度に「こないだ酔ってまた財布なくしました」とか「電車で寝過ごして気づいたら終点でした」といった類の話は頻繁にある。話題作りのためだけにわざとそんなことをするのはもはやただの変態でしかないので、そこに関しては真面目にやらかしているものと思われる。彼がスケートボードについての持論を声高に語るところはあまり見かけない。だが彼の奥底にはいつも自分らしくあることへのこだわりが強く存在している。彼が選ぶスポットとトリックにはそれがわかりやすく現れており、むしろそこに関しては天然どころかゴリゴリの確信犯と言える。さらに加えて言えばそこに至るプロセスとアフター乾杯までの流れにも彼ならではのこだわりがあり、自分にとって幸せな1日の過ごし方を大切にしている。言葉よりも行為で多くを表現している。長年チェックしている人なら気づくことだが、彼は長らく決まったデッキカンパニーからのサポートを受けていない。彼ほどの猛者にオファーがないはずはなく、それもまた現時点の彼の意思表示である。

かねこ・じろう｜1988年、北海道函館市出身。東京での暮らしは今年で10年目を迎えた。床屋でのオーダーはサモハン・キンポー。スポンサーはBrixton、Satori Wheels、Chaos Fishing Club、Juice。

KENTO YOSHIOKA

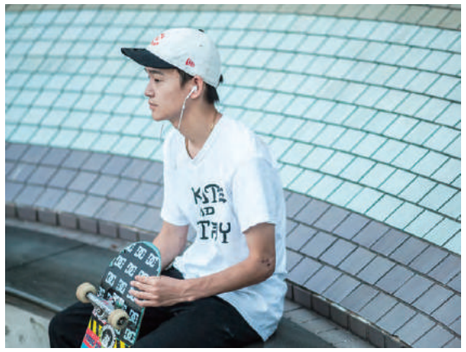
Wallie 50-50 grind
腿上ほどの高さの縁石に、ウォーリーからの50-50。「手品師」と称される彼の引き出しは安定した実力のもとに成立している。

よしおか・けんと | 1999年、愛媛県出身。中学卒業とともに単身上京。Vantanスケートボード学科特待生。スポンサーはWelcome Skateboards、Venture Trucks、Bones Bearings、EAZY M!SS、Dickies、Instant、Maison Shake Junzi、adidas Skateboarding(Flow)

吉岡賢人

化け物揃いの現代における異端児であり、キーマン。

「メディアに出るなんて自分とは関係ない世界の話だと思ってました」。彼のその一言は意外だった。意識の変わるきっかけとなったのはVHSMAGの定番企画、一本への出演。彼がまだ愛媛にいた中学生の頃だった。「自分でも出られるんだって、その時初めて思いました」。そこから、どうすれば自分をアピールすることができるのかを考えるようになっていったという。今や吉岡賢人は昨今出現しまくる怪物的ティーンスケーターたちの中でもひとつの象徴的な存在になったと言っても過言ではない。同世代が世界規模のコンテストでその頭角を現していく中、彼はまた違うアプローチでここまでやってきた。そもそも人並み外れたスキルの基盤の上に、温故知新とアイデアを盛り込んだ滑りは幅広い層にファンを持つ。物心つく頃にはすでにSNSが当たり前にあった世代。iPhoneひとつでできることにいち早く対応しappleやPokett Patrolといったオンラインを軸とした、言わばセルフメディアを立ち上げた。その活動は効率的で、あまりにもスムースに彼らを世に知らしめるに至る。まだ18歳。この号が出る頃、彼は米TWSとのビデオプロジェクトのため人生2度目のNYにいる。少なくとも今後10年の日本のスケートシーンにおけるキーマンになるであろうことはもはや目に見えている。



白井空良

相模原が生んだ、世界標準の怪物。

ゲームの中のようなトリックを1発で決める。近年の若手たちは単にメイク率だけを見ても様子がおかしい。スケートパークの増加に伴い幼い頃からいい環境で育つスケーターが増えたことや、インターネットの進化で情報伝達速度が劇的に早まったことによるスケート水準の統一など、その要因はきっとたくさんある。「日本」とか「世界」とかの括りすらこの世代にはもはやあまり関係のない話のようにすら思える。そんな新世代の中でも白井空良はその代表的なひとりである。今年5月、日本に初上陸したコンテストDamn Amで見事優勝し、次回のTampa Amの準決勝シード権を獲得。2020年に控える東京五輪での代表選手入りも決して夢ではない位置につけている。かと言って、ただコンテストに特化したスケーターではない。パークとは異なりさまざまな悪条件の重なる路上においてもちゃんと結果を残せる。スケートボードのオリンピック種目入りには相変わらず賛否両論があるものの、そもそも身近な国内で隣にいる少年の激ヤバなスケートを目の当たりにできることを個人的に嬉しく思う。スケートボードがスポーツなのかそうじゃないのかと言った類の話は実際答えが出ようもないもので、滑っている本人が自分の思う通りの捉え方を貫き通すことの方がよほど重要である。周囲の大人たちの期待はさておき、白井空良が今後どんな道を選ぼうが、どちらでもいい。意志を持ち滑っているのはあくまでも空良自身である。競技場か、路上なのか、どんなかたちであったとしてもこのとてつもない才能と努力の塊が今後も我々を熱狂させてくれることを望む。

しらい・そら｜2001年、神奈川県相模原市出身。世界に最も近いスケーターのひとりと評される期待の星。今年5月に開催されたDamn Am Japanでは見事優勝を果たした。スポンサーはDC、Grizzly Griptape Japan、ムラサキパーク東京。

SORA SHIRAI

Fs 180 to fakie 50-50 grind

Damn Am Japanの決勝ランではレッジで決めていたFs 180からの50-50。数々のトリックが生み出されてきたフェイマススポットに新たなレコードを刻む。

YUKI “JOHNNY” HIROSE

Ollie thread the needle

午前4時。繁華街がほんのひととき眠る夜と朝の狭間、丁寧に叩いた隙間抜けオーリー。ゾンビのような酔っ払いに人違いで絡まれるオプションもきっちり体験。

廣瀬祐樹

路地裏の、ジョニーなりの魅せ方。

「ジョニー」の愛称で親しまれる広瀬祐樹。過去から現在に至るまで数々の名スケーターを輩出し続ける横須賀の出身である。諸先輩方からの期待を背負った十代の彼は「何かすごいことやんなきゃ」という意識にいつも追われていたという。結果、度重なる大きな怪我を負い思う通りに滑れなくなる日々が続いた。期待を重圧に変換してしまった若かりし彼の精神構造は、普段からとても優しくてなぜか若干クネクネしていて、時にゲイ疑惑すら浮上する様を見ていればなんとなく想像がつく。転機となったのは彼が20歳の頃。「大きなことをやらなくてもジョニーは動きで魅せられるから」。それは現在hulahoopersを主宰するフィルマー杉本 篤の言葉だった。それ以来、気負いは徐々に薄れていったという。この記事で初めてジョニーのことを知ったという人がいたなら、最近VHSMAGに公開されたPick Upパートも是非併せてチェックしていただきたい。巨大スポットに突っ込むわけでもなければ、取り立ててクリエイティブというわけでもない。けれど、そのシンプルなスケートの中での流れるような全身の動きと時折現れる指先や膝の角度は無意識にも観る者の心に刻む何かを持っている。指先のかたちなんて、あまりにもマニアック過ぎるのかもしれないが、スケートボードにはそういった視点も確実に存在している。ただ難しいことができるだけが価値とは限らない。いわゆる「ヤバさ」のポイントは視点次第で無限にある。美しくスケートできるということが、十分に彼ならではの特殊能力である。

ひろせ・ゆうき｜1988年、神奈川県横須賀市出身。名スケーター揃いの神奈川でもトップクラスのスタイラー。肩書きは「ファンシー」。スポンサーはUnown、Ace Trucks、Satori Wheels、Slacclark。

GENKI SUNAGAWA

Caveman into wall

板を持って走ってウォールイン。話題のオリンピックではケイブマン系トリックが禁止されたりするのだろうか。もし万が一そんなことがあれば、オリンピックはクソだという結論になってしまうのかもしれない。

すながわ・げんき｜1987年、沖縄県出身。あらゆる種類のスポットへの対応力の高さとトリックの引き出しの多さに定評あり。別名「技の百貨店」。スポンサーはMxMxM sb、FTC、Ace Trucks、Spitfire Wheels、Arktz、The Parlour、Skullcandy。

砂川元気

あるのは板と己のみ。隣り合わせの創造と破壊。

砂川元気はどこでも滑れる。フラットがあればデモンストレーションが可能で、何かオブジェクトがひとつでもあればおそらく数分のクリップを成立させられる。大げさではなく本当にそんなスケーターである。トランジションにもレッジにも回しにも対応しているし、がっちりなハンドレールだったとしても全力でお願いすればきっと彼なりに何かしらの答えを出してくれる。言わば全地形対応型スケーター。そんなことが可能な理由は、根本的なスキルと身体能力の高さ、アイデアの豊富さと柔軟性、過去のスケート史についての知識の量など、いくつか挙げられる。そもそもスケートボードにルールブックは存在しない。フラットトリックのメイク率のみで競うスケートゲームや、ランの時間が限られたコンテストは別にしても基本的には存在しないはずで、それこそがスケートボーディングの絶対的な魅力のひとつである。ただ一方でスケートボードの歴史の中では、多くの支持を得ることによって確立され、定着し、クラシックとなっていく物事が存在するのも事実である。トリックはもちろんのこと、ファッションから価値観、メンタリティまでもがそこには含まれる。それでもまたどこかで既存のものをぶち壊し、新しい何かを生み出してくるのがスケートボーダーたちである。創造と破壊を繰り返す。砂川元気はオールラウンダーであっても決して色モノではない。むしろ根源的なスケートボーダーである。

SHINSUKE HARUTA

春田真佑

独自の目線と方法論で魅せる、路上での表現。

Tightbooth Productionから発信されるLENZシリーズの1作目にてその認知度を全国区まで広げた春田真佑。その後も彼は日本各地のフィルムメーカーとのセッションを経てさまざまなビデオパートを残すこととなる。その根底にあるものは自分の生き様をフッテージという形として残したいという強い意志。彼を撮影した者はみなこのモチベーションを感じているだろうということが想像される。ストイックに見える動きを支えているのが、彼のストックしているスポットの量。ホームタウンである大阪はもちろんのこと、ツアー先の地方でもその街で仲間と遊びながら、独自の目線でそのアーキテクチャーをスポットに変換している。そして重要なのがそういった妄想をきっちりメイクまで持っていく実力。彼の映像の随所にそういったこだわりが見てとれるのでぜひ注目してほしい。スキル、スタイル、身体能力。難易度が高いスケートボードというアートフォームでこれらは非常に重要な要素だが「スポットを見つけ、自分らしいアイデアで表現する」といったことも賞賛されるべきひとつの要素であることは揺るぎない事実である。

はるた・しんすけ｜1986年、高知県出身。Strush Wheelsよりシグネチャーウィールをリリースしたばかり。長年の大阪生活から地元に戻りスケートライフの転機を迎えるであろう彼の今後の動きは興味深い。スポンサーはShred、Strush Wheels、AREth、Whimsy、Woodbrain、KP Tokyo、Waum。

Noseblunt slide
春田真佑はストリートスケートの予定調和を破壊してみせる。長らく存在した東京のスポットにて、誰も発想できなかった使い方で吹かす新しい風。

Smithgrind

大阪アメ村三角公園。彼はどれほどの長い時間ここで仲間たちと過ごしたのだろう。近隣にて不法投棄されたであろう什器を使ってのスミスグラインド。